

- (一) このことは、メガステネースも伝えている (Strab, XV, 1, 53)。積尊の父の名は淨飯王 (Suddhodana) であった。odana という語は、『リグ・ヴェーダ』以来現われるが、はたして米飯を意味していたかどうか不明である。特に米粒を意味する *taṇḍila* という語は『リグ・ヴェーダ』には存せず、『アタルヴァ・ヴェーダ』以後、ブラーフマナ文献にはしばしば現われるから、『リグ・ヴェーダ』時代にはまだ稲作は行なわれていなかったのであろう。sāhi が稲を意味する例は、ヴェーダ文献には存しない (Vedic Index, vol. 1, p. 297; vol. II, p. 376)。今日でもガンジス河流域のうちラクノウから下流地方が稲作を行なっている。なおチベット人は Suddhodana を *zas gsañ ma* と訳して、odana を食物一般と解している。
- (二) *pros gar ton koinonikon kai ton politikon hion ekeinōs kreiton.*

第三編 都市の成立——仏教興起の社会的基盤

時代の概観

ガンジス河上流地方に定住していたアーリヤ人はその後次第に東方に進出し、その中流地方に移住したが、それとともに社会的・文化的に大きな目ざましい変動が起こった。

まずアーリヤ人と先住民族との混血が盛んに行なわれた。ここに形成された新たな民族はもはやアーリヤ人の伝統的な風習・儀礼を忠実に遵守しようとはしないで、自由にほいままにふるまった。彼らはヴェーダ文化を無視し、アーリヤ系の崩れた俗語 (Prakrit) を使用していた。彼らの定住した地方は地味肥沃で多量の農産物を産出したために、彼らの物質的 생활は豊かでもた安易となり、物資が豊富になるとともに、次第に商工業が盛んとなり、多数の小都市を成立させるにいたった。

最初はこれらの小都市を中心に群小国家が多数併存し、そのうちの或るものは貴族政治あるいは共和政治を行っていたが、それらは次第に国王の統治する大国に併合されてゆく趨勢にあった。大国の首都は繁栄し、そこには壮大な都市が建設された。当時はコーサラ (Kosala) ・マガダ (Magadha) ・

アヴァンティ (Avanti)・ヴァンサ (Vamsa) の四国が最も有力であった。これらの大国においては王権がいちじるしく伸張し、王族は人間のうちでの最上者と見なされていたが、バラモンは従前ほどの威信をもっていなかった。また諸都市においては商工業が非常に発達し、貨幣経済の進展とともに莫大な富が蓄積され、商工業者たちは多数の組合を形成し、都市内の経済的実権を掌握していた。

旧来の階級制度は崩壊しつつあった。他方物質的生活が豊かに安楽になるにつれて、ややもすれば物質的享楽に耽り、道徳の頹廢の現象もようやく顕著になった。

こういう空気のうちに生活する人々の眼には、旧来のヴェーダの宗教は単なる迷信としか映らなかつた。新しい時代の動きに応じて、唯物論者・懐疑論者・快樂論者・運命論者などが輩出して議論を闘わせた。また他方では享樂の生活に倦怠を感じ、出家して禪定に専念する行者も多数現われた。この時代に出現した新しい思想家たちを「つとめる人」(śramaṇa, śramaṇa 沙門)と称する。彼らに好都合なことには、当時は思想の自由および発表の自由が極度に容認されていた。当時の諸国王や諸都市はしばしば哲人たちの討論会を開いて彼らに自由に対論させたが、いかなる意見を述べても処罰されることはなかつた。当時の異端説は原始仏教聖典の中に六十二見としてまとめられているが、そのきわめて古い詩句のうちにプーラナ、パクダ、ゴースーラ、ニガンタ・ナータプッタという諸哲人の名がその各自の学説とともに言及され、またその他にアジタ、サンジャヤの二人を加えて「六師」とよぶこともあるが、これらの人々が当時の有力な思想家であった。

この時代に現われた諸教説はインド一般としては異端と見なされている。そのわけはヴェーダ聖典の権威を真正面から否定したからである。仏教もその興起した当初には、異端説の一つにほかならなかつたのである。

このように、原始仏教ならびにジャイナ教、あるいはその他の自由思想が出現したのは、古代インド(ほぼ西紀前六、五世紀)において、ガンジス河の流域に都市が成立し、商業活動が急激に発展した時代においてであった。原始仏教信徒の社会層を調べてみると、商人および手工業者が圧倒的に多いしたがってこの時代におけるこれらの宗教の社会的基盤を解明することは、ひろく東洋文化の理解のためにも重要な意味をもっていると考えられる。以下においては原始仏教聖典およびジャイナ教聖典のうちの諸記述をもとにして、これを他の方面の資料から補って述べたいと思う。⁽¹⁾

(1) これらの諸記述の時代比定はきわめて困難であるが、ともかく仏教興起前後の数世紀に関するものであるということは確かである。その記述をどの時代の社会状況を示す資料として使つてよいか、問題になるが、『パーニニ文典』の提供する諸資料は非常に貴重である。 Vasudeva S. Agrawala, "Political Data in Pāṇini's Aṣṭādhyāyī," *Sarup Mem. Vol.*, pp. 182-196; ———, *India as Known to Pāṇini* (University of Lucknow, 1953).